

確かな手応え

今回の「Past and present」展、ギャラリー1階には、木下さんの1990年から2007年までの30cm×30cmの作品28点が並ぶという。展示はさぞかし壮観なものとなるだろう。現在編集が進行中の『木下恵介 作品集1983～2022』、ゲラを拝見させていただくと、作品はいくつかの時期でまとめられ、作家自身による各時期作品群への分析がなされている。分析は、どれも大変に的確で、自身の過去の活動への冷静な眼差しが感じられる。作家自身が、自己の作品に対してそのように的確な分析をなすことは、意外に難しいことだと思う。

作品を過去へと遡ってゆき、またそこからごく最近の2021年作品までへと見渡してみると、凹版、平版、凸版にわたり、リトグラフ、エッチングやアクアチント、ドライポイント、オープンバイトやスピットバイトなど、そしてそれらの技法は、さまざまに組み合わせられ、一点一点の作品が丹念に生み出されていることがわかる。多種の技法が作品上で一気に重ねられ、多様な効果、作用、出来事が画面上に出現してくる。「接合」や「併置」といった、木下さんの作品の魅力的な特徴が、一層それらの効果を際立たせている。

草木や樹木は、膨らみ変化をやめない大気に囲まれ佇むかのように描かれている。線描は、多数の版種の使用により自在に姿を変える。線は、驟雨（しゅうう）のような縦の激しさを帯びている時もある。モノタイプでは、水気を含み豊かにふくらんでいる。「接合・併置」の方法は、窓から遠くをのぞむように風景を切り取り、そして他の複数の異なる要素が一体として並べられてゆく。そのことが穏（おだ）やかさと大胆さを共に作品に生み出してくる。描き出された水面の波紋、テーブルの上に置かれた一つのグラスは、それらのものがそこにあること、そしてそこでひとつひとつが、確かに息づいていることを物語る。そのことのかげがえのなさが画面からダイナミックに発せられる。一方、2010年頃から、住まい周辺、多摩川でのジョギングが始められた。いずみ紙を用いた一版一色刷りのそれらリトグラフ作品では、作家自身の風景への没入感が感じられてくる。走り続け、自然を巡り、風景の中、自然の中へと入ってゆく。緩やかだが、確実な一步一步は、けれども生きることの、そして生きていることの豊かさと確かな手応えを、墨一色のモノクロームの世界によって、見るものへと力強く伝えてくる。そして、モノクロームは、2021年作各20×20cmの《Monotype》と題された作品群では、さまざまな色と線と形態の組み合わせへと大胆に変容されたりもするのだろう。

すまいを移された宮崎の豊かな自然と生活の中、一層に息吹を得た木下さんの、更なる制作の展開が期待される。

清水 哲朗（しみず・てつお）／美術評論家